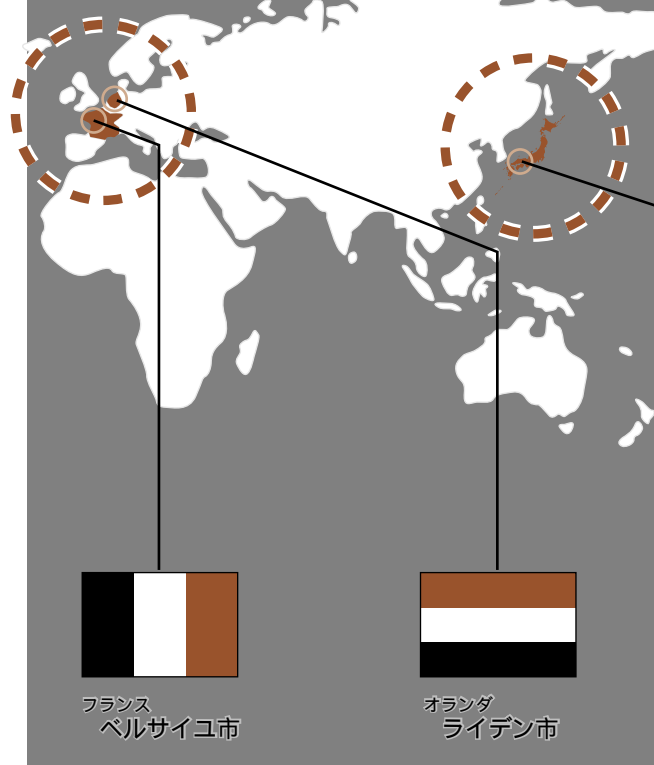


津山市で初めて開催された本格的な国際会議「第12回世界大都市十字路会議」。歴史的な遺産や文化を活用した「まちづくり・地域づくり」を行っている国内外の地方都市が集まりました。外国からは、サンタフェ市（アメリカ）・ライデン市（オランダ）・ベルサイユ市（フランス）が、国内からは津山市のほか、高山市（岐阜県）・津和野町（鳥取県）が参加。「歴史資産を活かしたまちづくり」をテーマに、それぞれの市や町の取り組みが紹介され、パネルディスカッションによる意見交換も行われました。

会議のようすは同時通訳機を使って聴くことができ、会場の参加者は、それぞれの「まち」の特徴を活かしたまちづくりへの取り組みに耳を傾けました。



まちづくりの原点は
市民のやさしさから

高山市（土野 守市長）

飛騨地域の中心都市・高山の町並みは、こう配の緩い切妻屋根の建物が特徴を同じくして続き、統一感のある美しい雰囲気を出しています。そして、通りには電柱がなく、電線類は軒下に配線されています。

高山市におけるまちづくりの原点は、市民の歴史的な町並み・景観を守ろうという思いから生まれ、自主的な保存活動が続けられています。また、訪れる人々を大切にしたいという思いも根付いています。こうした「もてなしの心」に支えられ

「心のふるさと飛騨高山」として、多くの観光客でにぎわうまちになりました。

高山市は現在、住みよいまち、行きよいまち「福祉観光都市」をめざし、パリアフリーのまちづくりに取り組んでいます。

そして、来年2月には合併により、北アルプスの山々や奥飛騨温泉郷など多くの観光資源を有する、東京とほぼ同じ面積の日本一広い市になる予定です。

環境変化に対応して
町の景観を守る

津和野町（中島 巖町長）

山陰の小京都・津和野町は、山口県と境を接する城下町です。古い町並



みや京都から伝わった驚異、流鏝馬といった伝統文化も残っています。

町の大きな転機は、昭和40年代後半から始まった観光ブームの到来。山間のひなびた城下町に突然観光客が大挙して押し寄せ、町中がパニックになりました。この変化にいち早く対応し、環境保全条例を制定して景観を守ったことが、現在につながっています。

近年では、美術館と温浴施設が連結した道の駅の建設や町内循環バスの運行により観光客の長期滞在も促しています。また、さらに歴史資産を活かすため、電線の地中埋設化や緑化推進などによる美観アップにも力を入れています。

市民と行政による
共創・協働のまちづくり

津山市（中尾嘉伸市長）

今年、初代津山藩主森忠政が築城を開始し、城下町がつくられてちょうど400年。市民が中心となってさまざまな記念事業が繰り広げられています。そして、備中櫓を当時の姿そのままに再現する、壮大な取り組みも進行中です。

津山城跡の東に位置する城東地区は、約1・2キロメートルにわたり町屋や商家、蔵など、江戸時代から昭和初期までの時代に対応した造りが保存され、現在の暮らしと両立しています。また城西地区では、町の雰囲気を残しながら後世にその文化を伝えようと、町内会や青年のグループが集まって「城西まるごと博物館フェア」を開催し、歴史資産を活かしたまちづくりに取り組んでいます。

津山市では、市民と行政が一体となった「共創・協働」でまちづくりを進めています。そして、津山のまちづくりは「住みながら保存していく」「歴史資産を活かしながら暮らしを楽しむ」ことが基本となっています。